

< 概要版 >

1 背景と現状

八幡平市松尾地区には 1914 年から約半世紀に渡って、東洋一の硫黄鉱山として栄えており、当時では珍しい鉄筋コンクリートのアパートや映画館などが開設された雲上の楽園と称された鉱山があった。

しかし、石油の生成過程でコストの低い硫黄が流通して競争力が低下、1969 年に閉山に追い込まれた後、大量のヒ素を含んだ強酸性水によって北上川が汚染され、周辺環境が悪化し、次第に「負の遺産」とも言われるようになり、その水質改善に現在でも維持費に年間約 5 億円が投じられている。

八幡平市は、十和田八幡平国立公園等の山岳資源、冬季のスキー場等の自然環境を活かした観光が主要産業となっていた。しかし、スキー人口の減少、それに追い討ちをかけるように岩手山の火山活動活発化に伴う風評被害により、この10年で八幡平の宿泊入込数はほぼ半減(H19 八幡平市観光振興計画より)し、観光産業のみならず地域経済へ大きなダメージをきたしている。

これらの現状から、現在、鉱山跡地に緑を蘇らせる為に **松尾鉱山跡地での森林再生活動**、交流人口を増加させて地域振興に繋げる為に **八幡平市観光協会を始め、地元宿泊施設において、誘客に向けた取組み**が行われている。

2 事業の目的

八幡平市松尾地区が抱えている「負の遺産」と観光産業の低迷について、これらの課題を解決し地域の活性化を図るために、**松尾鉱山跡地を地域資源として活用し、環境をテーマとした観光振興による交流人口の増大に向けて、自らが主体となり自ら考えて地域活性化に取り組む担い手を育成する**ことを目的として、本事業を実施した。

3 実施体制

実施体制は下図のとおり。



4 実施内容

(1)対象者

担い手は、地域のガイドを対象とした。八幡平市松尾地区が抱えている「負の遺産・松尾鉦山跡地」と観光産業の低迷から、これらの課題を解決する一つの切り口として負の遺産を地域資源として活用し、環境学習をテーマとした観光振興を図るために地域の案内人が必要との理由からである。

(2)実施内容

本事業では、交流人口の増大に向けて、八幡平で活動しているガイドに産業遺産、環境といったガイドの幅を広げるため、座学と現地研修、実地研修を実施。

また、研修を通じて地域活性化の意識を行くことでさらに意識を高めてもらうように研修内容を構成した。実施内容、スケジュールは以下のとおり。

協議会の開催 3回(実施内容検討、確認、報告)

車座研修会1(産業遺産、森林再生、商品造成の3テーマ)

・座学 3回 ・現地 3回

実地研修(車座研修会の成果を試す場)

・現地 2回

車座研修会2(実地研修を踏まえての振り返り)

・座学 1回

<実施スケジュール>

実施日	項目	内容
6/26	第1回協議会	協議会の設立 地域再生を担う人づくり支援調査事業 ・事業概要、実施スケジュールについて
8/28	車座研修会1(現地)	産業遺産をテーマに以下の内容を実施。 地域において「松尾鉦山」が貢献してきたこと 鉦山職員としての「松尾鉦山跡地」に対する思い 「松尾鉦山」の歴史を伝えることの意味
8/29	車座研修会1(座学)	産業遺産をテーマに以下の内容を実施。 世界の産業遺産の現状と松尾鉦山の産業遺産 他地域での産業遺産の活用事例について 「松尾鉦山跡地」を活用した観光・教育の提案
9/3	車座研修会1(座学)	環境&森林再生をテーマに以下の内容を実施。 森林再生活動に関わる取組みについて ～水産廃棄物を活用した強酸性土壌改良と植生回復～
9/4	車座研修会1(現地)	環境&森林再生をテーマに以下の内容を実施。 松尾鉦山跡地における森林再生活動について ～この山をどのようにしていくか、今どのような活動をしているのか～
9/10	車座研修会1(座学)	商品造成をテーマに以下の内容を実施。 観光における現在のニーズと八幡平地域の魅力 ニーズを踏まえたプログラム作りについて

9/17	実地研修(準備)	ガイドの実演から参加者の目線で確認するために以下の内容を実施。 中和処理施設の見学 実演を通して見るガイドのポイント(鉱山跡地、焼走り、ブナ二次林)
10/10	第2回協議会	研修会の成果を試すモニターツアーの打合せを実施。 当日の流れの確認 ガイド参加者の確認 役割分担
10/22 ~ 10/24	実地研修	ツアー参加者に研修の成果を試す為にガイドを実演。 鉱山跡地のガイド 岩手山焼走り溶岩流のガイド 黒谷地湿原のガイド 安比高原ブナの二次林のガイド
11/20	車座研修会2 (振り返り)	今後の活動の方向性を検討するため、以下のテーマで実施。 参加者アンケートから見るモニターツアーの振り返り 今後のツアーの仕掛け方について また、「松尾鉱山跡地を活用して交流人口を増やす為には？」 をテーマに意見交換を実施。
12/1	第3回協議会	本事業終了後、今後の方向性について検討。 雲上の楽園再生プロジェクトについて 地域づくり計画について

5 評価指標と成果、課題

本事業で設定した目標、それに伴った成果と課題は以下のとおり。

目標/評価指標	到達点/成果	達成・未達成の要因
(1) 養成講座受講生 30名の確保	養成講座受講生 23名確保 (目標値の77%) /実際にガイドをしている人を中心に意欲 の高い人が集まり、効果的な研修会が 実施できた。	地域をよく理解している人、ガイド経 験者に絞って募集をした方が短期間で 効果的な研修ができると考えたが、 事業の一部がガイドの繁忙期と重なり、 目標値には達しなかった。
(2) 「ガイドノート(1)」作成による 基礎情報の習得 モニターツアーで研修内容を活か すことができた受講者を80%確保	基礎情報を習得済 (モニターツアーで研修内容を活かすこ とができた受講者100%確保)	産業遺産、環境・森林再生、商品 造成を座学、フィールドワークで実施した という研修会の構成が効果的であ った為と考える。
(3) OJTで必要なスキルを習得 モニターツアー参加者の「よい」評 価80%を確保	ガイドに必要なスキルを習得 (ツアー参加者の「よい」「どちらかといえ ばよい」91.2%)	実際にガイド経験があり、なおかつ 意欲の高い人が集まり効果的な研 修ができたこと、ツアー参加者にも その熱意が伝わったことが「よい」評 価に繋がった。
(4) 商品造成力の習得 10本の環境学習体験 プログラムの完成 3本の環境ツアー(1泊2日) 企画の完成	環境学習体験プログラム:未達成(4本) 環境ツアー:未達成(1本) /研修会を通して、交流人口を増やすこ とが必要であることを学んだこと、それに 向けた提案があった。	ガイドの基礎情報、スキル習得を中 心に養成したため、目標は未達成 である。

- 1 研修会での配布資料にガイドのポイントを記入し、最終的には個人がオリジナルのガイドブックとして使用。

< 課題 >

(1) ガイドの継続的な育成と幅広い地域情報習得

研修会にて基礎情報の習得はできたが、まだ実践の場が不足していること、また意欲の高い受講者も多くガイドの重要性を認識し、現地での実践の場を望んでいることから、スキルアップ及び新規育成のためのカリキュラムを取り入れた継続開催が必要と考える。

(2) テーマを持った環境学習及び楽しい地域の生活文化体験のプログラム作成

モニターツアー実施結果、参加者のリピーター率が高いことと口コミが効果的であることがわかった。何回も来て頂けるようにする為には、色々なテーマや体験が必要である。その中でも新たなテーマとして環境学習や地域の生活体験ができるプログラムの作成が必要である。

(3) 情報発信・販売する仕組みの構築

今回のモニターツアーの集客方法として、一番効果があったのは、過去のモニターツアー参加者へ送った手紙であった。それ以外にも情報発信はされているが、さらなる来訪者を増やす為には効果的な情報発信が不足している。

今後はゆったりとした旅を提供する「スローステイ」はシニア層に、松尾鉱山跡地を活用した「環境学習」は中高生の教育旅行にターゲットを絞ることが重要である。

(4) 様々な主体との連携

(1)～(3)の課題を解決するためには、様々な主体とのさらなる連携をする必要がある。また、ガイド受講者が感じているように、地域住民の関心が高いとはいえないが、地域一体となったおもてなしや体験プログラムを進める為にも、地域意識の醸成が必要である。

6 総括～今後の取組み～

環境をテーマとした観光振興による交流人口の増大に向けた地域再生を担う人材として、地域の案内人であるガイドを養成することを実施した。その結果、交流人口の増大に向けたリピーターの確保については、やはりガイドが必要であることが検証できた。

車座研修会、OJT を通して環境をテーマとしたツアーを受入れる為に基礎情報、ガイドのスキルを習得することができた。しかし、今年度はガイド力の養成を中心に行った為、次のステップとなる商品造り力は十分に習得できていないが、テーマ性を持ったツアープログラムの作成、より楽しんで頂くための地域の生活文化体験のプログラム作成などが必要であるだけでなく、それらの持続的に情報発信して販売する仕組みを取り入れることが必要であることを課題として受講生が認識したことは次に繋がる大きな成果である。

< 今後の取組み >

(1) ガイド育成について

ガイドのスキルをあげる為には実践機会を増やす取組みが必要であり、今後もガイドの養成講座を継続する。また広く地域情報を習得する為に、地域住民や生活文化体験プログラムの提供者と連携が必要であること、受講者もそのことを望んでいることから、21年度は交流の場を設けることを予定している。

(2) 体験プログラムについて

教育旅行の誘致を主目的として21年度より、環境学習体験、生活文化体験プログラムの作成を行う。作成にあたっては環境団体、宿泊施設、地域住民などの様々な主体と連携をし、実践者(受入側)の商品造り力を育成する。

(3) 情報発信・販売する仕組み

体験プログラムや施設等の情報発信から販売、予約管理までを一括して行うオンパクの手法を取り入れた「サトハク(いわてNPOセンターで作成)」ホームページ等を活用し、ターゲットをより明確にした効果的な情報発信と販売力を強化する。

(4) (1)～(3)の支援、コーディネートを実施

地域住民の意識醸成を図ると共に、地域住民、研究機関、民間企業、行政など関連する木団体の合意を得て、進めていく。これらの取組みを支援、コーディネートすることが協議会の役割である。